

## I. ドビュッシーについて

### ドビュッシー、クロード *Debussy, Claude (1862–1918)*



1862年8月22日サン-ジェルマン-アン-レー生、1918年3月25日パリ没。  
フランスの作曲家。形式、和声、色彩において、伝統的規準によらない  
全く独自のオーケストラやピアノのための作品を多数残した。

また、歌曲や唯一のオペラでは、控えめな表現による、新しい内面的  
心理描写に成功した。後世の作曲家で、ドビュッシーの影響を受けて  
いない者はほとんど見られない。

ニューグローヴ世界音楽大事典より

## II. ドビュッシー一年表

### 生涯

### 主要作品

8月22日パリ近郊のサン＝  
ジェルマン＝アン＝レーで生まれる

1862年

パリ音楽院に入学

1872年(10歳)

ソルフェージュ科で第1等メダル

1876年(14歳)

ピアノ伴奏科で第1等賞

1880年(18歳)

交響曲ロ短調

ローマ大賞を獲得

1884年(22歳)

カンタータ「放蕩息子」

留学のためローマへ

1885年(23歳)

バイロイトへ初めて行く

1888年(26歳)

カンタータ「選ばれたおとめ」

パリの万国博覧会で  
ガムラン音楽を聴く

1889年(27歳)

ボードレールの5つの詩

1890年(28歳)

ベルガマスク組曲

1893年(31歳)

弦楽四重奏曲

1894年(32歳)

牧神の午後への前奏曲  
**映像(1894)**

リリー・テクシエと結婚

1899年(37歳)

1902年(40歳)

歌劇「ペレアスとメリザンド」

レジオン・ドヌール5等勲章受勲

1903年(41歳)

版画

リリーと離婚。エマとの間に  
子供(クロード＝エマ)が生まれる

1905年(43歳)

海  
**映像 第1集**

1907年(45歳)

**映像 第2集**

1908年(46歳)

子供の領分  
**映像 第3集 第2曲イベリア**

パリ音楽院上級評議会に  
迎えられる

1909年(47歳)

**映像 第3集 第3曲春のロンド**

1910年(48歳)

前奏曲集・第1巻

1911年(49歳)

神秘劇「聖セバスチヤンの殉教」

1912年(50歳)

**映像 第3集 第1曲ジーク**

第1次世界大戦勃発

1914年(52歳)

3月25日 直腸癌で息をひきとる

1918年(55歳)

「ドビュッシー」作曲家別名曲解説ライブラリー 音楽之友社  
名曲解説全集 第5巻管弦楽曲Ⅱ 音楽之友社

### III. ドビュッシーの創作

#### I. 習作期の作品 (1872～1884)

青春時代、音楽院在籍中の諸作はおおむね習作の域を出ぬというべきであろう。「類い稀なみずみずしさといささか移ろいやすい優雅さとの、気配を示すにとどまる(フェルショー)☆」

#### II. 自己形成期の作品 (1884～1893)

さまざまな影響を取捨しながら、自分の語法や様式を捜して、次第にそれらをものにしていった時代の作品である。《蕩児》から《選ばれたおとめ》《ボードレールの五つの詩》《ベルガマスク》にいたる。それらはやがて確立される個性的な様式を多かれ少なかれ予言する。

#### III. 確立期の作品 (1893～1902)

《弦楽四重奏曲》そして《牧神の午後への前奏曲》で、ドビュッシーの音楽的・美的な個性は、みごとに確立された。以後《ペレアス》までの約十年は、その個性が確認されてゆく時期とっていいように思う。《牧神……》と《ペレアス》では、ジャンルの違いから当然表現の上に形態的な差異があり、十年近い年輪が両者をおのずから隔てている面もあるが、(中略)創作の姿勢の根本は多分に共通であるようだ。

#### IV. 発展期の作品 (1903～1910)

《ペレアス》の先に新しい地平を広げた時期のもの。円熟期といってもいいが、メチエの円熟と同時に創作の姿勢が或る転換、というより発展を示しており、その発展は、IIIで確立された様式に基盤をおきながら、《版画》《海》から《子供の領分》《前奏曲集・第一巻》にいたる作品の数々を多様に展開する。

#### V. 自在(メトリーズ)時期の作品 (1911～)

《聖セバスチヤンの殉教》以後。総合期ないし晩年の作品、といった言い方を避けたのは、「もしドビュッシーがより長く生命の火をもやすことを許されていたならば、先々まで何らかの展開を見せたであろう」、実際にそれ以前とまたちがった試みを行っている時期だからである。しかも同時に「すでに得たスタイルを支配し、一種の禁欲によってその芸術の精髓にいたるべく、すべてを選りわけ篩にかけ」(フェルショー)語法の自在さを獲得した時期でもある。すなわち自在の時期とよぶ所以だ。

「ドビュッシー」作曲家別名曲解説ライブラリー 音楽之友社  
平島正郎著「ドビュッシー」大音楽家・人と作品 音楽之友社

★年代的なグループ分けはフェルショーがしたものを一部平島正郎が修正している。

☆ギ・フェルショー Guy Ferchault フランスの音楽学者(1904年8月16日ロワール-エ-シエール県メール生, 1980年11月14日パリ没)。フェルショーは多くの学識者団体(文学, 美学, 音楽学)のメンバーであり, 44年にはヴェルサイユ室内楽協会を創設した。

## IV. 発展期の作品

### ピアノ作品

「ドビュッシーがピアノの詩学を更新する所の深奥な又は可愛らしい作品のジャンルと形式を本当に樹立するのは1903年に作曲された『版画 (Estamps)』によってである」(コルトー「フランスのピアノ音楽」安川定男・安川加寿子訳より)。(中略)このあと《歓びの島 (L'Isle joyeuse)》(1904)、《映像・第1集 (Images・1re serie)》(1905)、《同・第2集 (Images・2e serie)》(1907-08)、《子供の領分 (Children's Corner)》(1906-08)、《前奏曲集・第1巻 (Preludes, 1er Livre)》(1909-10)と、ピアノのために書かれた傑作が、つぎつぎとあらわれる。(中略)ドビュッシーが自作のピアノ曲に対していただいていた自負は、たとえば出版業者のデュランにあてた手紙のなかに見出されるつぎの言葉から、ありありとうかがえるだろう。

《映像》を弾いてみましたか・・・？まちがった自惚れでなしに、私は、これら3曲がよくできていて、ピアノの文献の中に彼らの場所を・・・(シュヴァイヤール(注1)流にいえば)シューマンの左、あるいはショパンの右・・・どちらともお好きなほうで結構・・・に占めるだろうということを、信じています。(1905・9・11付)

注1)カミーユ・シュヴァイヤール(1859-1923)はもっぱら指揮者として知られ、1907年以降ラムルー交響楽団の主任指揮者を務めた。

平島正郎著「ドビュッシー」大音楽家・人と作品 音楽之友社

### 管弦楽作品

1905年10月15日にラムルー演奏会でシュヴァイヤールの指揮により《海》が初演されたとき、純粋な内的な自発性によって自らを構築していくこの音楽はすぐに理解されなかった。それが未来の新しい音楽のあり方を指向している、20世紀以降音楽全体の指針になるという重要な意味に気づく人はおそらく皆無だっただろう。

松橋麻利著「ドビュッシー」作曲家・人と作品シリーズ 音楽之友社

《影[映]像》は、フランスの最も優れた画家たちのキャンバスを思い起こさせるようなさまざまな弦楽や和声の色彩に輝いている。彼の作品の新しさを構成しているのは、絵画的な要素の経験的な使用だからである。ドビュッシーは、7や9の和声を転調の道具としてではなく、彼の旋律や空虚5度同様自由に平行移動することができる自立的な要素として扱っているが、このことから、彼の音楽上の先祖はベートーヴェンの交響曲であるよりも、むしろ単旋律聖歌やオルガヌムであることがうかがえる。柔軟な旋律、開放された和声、そして音楽の付随物であるよりむしろ、その本質的な要素とみなされた音色に対して払われる他と同等に神経の行き届いた配慮、それらが《影[映]像》の中に明るく輝く個性の主な特徴である。

「新しい世紀の音楽」西洋音楽史大系 9 学習研究社

## V. 『映像』の作曲プラン

ドビュッシーが温めていたピアノのための《映像》シリーズについて、早くも1901年12月にビニェス(★)が触れている。それは独奏用と二台ピアノ用の各六曲で、彼はそのうちの〈水に映る影〉と〈運動〉を作曲者から聴かせてもらい、見事だと感激している。そしてドビュッシーは、この計画をより具体化させて、03年7月8日にデュラン(☆)と出版契約を交わした。それは《映像》と題された十二曲が対象で、ビニェスが伝える通り、各六曲から成る二集である。各集の前半三曲がピアノ独奏用、後半三曲が二台ピアノ用あるいは管弦楽用となっていた。指示されたタイトルは次の通りである。

松橋麻利著「ドビュッシー」作曲家・人と作品シリーズ 音楽之友社

★ リカルド・ビニェス Ricardo Viñes  
(1875年2月5日レリダ生, 1943年4月29日バルセロナ没) スペイン(カタルーニャ)のピアニスト。ドビュッシーの〈ピアノのために Pour le piano〉〈映像第1集 ImagesI〉〈喜びの島 L'isle joyeuse〉, など, 多くの作品を紹介した。

☆ デュラン Durand  
フランスの楽譜出版社。サン-サーンスやドビュッシー, ラヴェルのほとんどすべての作品の初版の出版社であり, 直接の購入によって彼らの全作品を獲得した。

ニューグローヴ世界音楽大事典より

### 契約時

<b>第1集</b> 1. 水に映る影 (ピアノ) 2. ラモー賛歌 (ピアノ) 3. 運動 (ピアノ) 4. イベリア (2台ピアノor管弦楽) 5. 悲しきジグ (2台ピアノor管弦楽) 6. ロンド (2台ピアノor管弦楽)
<b>第2集</b> 1. 葉末を渡る鐘 (ピアノ) 2. そして月は廃寺に沈む (ピアノ) 3. 金色の魚 (ピアノ) 4. (未定) 5. (未定) 6. (未定)

### 完成時

<b>第1集</b> 1. 水に映る影 (ピアノ) 2. ラモー賛歌 (ピアノ) 3. 運動 (ピアノ)
<b>第2集</b> 1. 葉末を渡る鐘 (ピアノ) 2. そして月は廃寺に沈む (ピアノ) 3. 金色の魚 (ピアノ)
<b>第3集</b> 1. イベリア (管弦楽) 2. ジグ (管弦楽) 3. 春のロンド (管弦楽)

## VI. 映像 Images 第1集・第2集 ～ピアノ～

1904年から1905年にかけて、《映像》第1集3曲が作曲され、2年後の1907年に第2集の3曲が作曲された。(中略)事物や情景をあるがままに、その雰囲気をもとに表現しようとする印象主義的な手法は、《映像》6曲においてさらに強調されている。(中略)ピアノ音楽の領域で、リストやショパンは、美しい旋律や旋律の展開、ダイナミックな表現によって新しい技法を開いたが、ドビュッシーは、機能性をもった和声の力で支えられた音のもつ緊張感をやわらげ、浮動させることによって、自然の情景や動きを微妙に描いてさらに新しい世界を開いた。

「ドビュッシー」作曲家別名曲解説ライブラリー 音楽之友社

### 第1集

第1曲「水の反映 Reflets dans l'eau」 アンダンティーノ・モルト 8分の4拍子

繊細なアルペッジョの美しさは、絵画的に光と陰とにつながり、水の反映が輝き、かつゆれ動く詩的な情緒をつたえる。

第2曲「ラモー礼賛 Hommage à Rameau」 レント・エ・グラヴェ 2分の3拍子

おごそかな、ゆったりした響きをもった曲である。  
フランス音楽の天才的祖先ラモーへのつきない尊敬が示されている。

第3曲「運動 Mouvement」 アニメ 4分の2拍子

運動という抽象的な感覚を音で表現している。

### 第2集

第1曲「葉ずえを渡る鐘の音 Cloches a travers les feuilles」 レント 4分の4拍子

〈水の反映〉と同様の手法で、流動的な形は、輪郭をぼかし、和声にヴェールをかぶせ、沈黙を長びかせ、独特の雰囲気を表している。

第2曲「そして月は廃寺に沈む Et la lune descend sur le temple qui fut」

レント 4分の4拍子

和声を付された旋律の流れが静かで瞑想風な表現となっている。

第3曲「金色の魚 Poissons d'or」 アニメ 4分の3拍子

中国か日本の、漆ぬりの盆に描かれた金魚を見て、その金魚の動きを描いたものといわれる。

「ドビュッシー」作曲家別名曲ライブラリー 音楽之友社

## Ⅶ. 映像 Images 第3集 ～管弦楽～

この《映像》第3集では、印象派風の作風をつきつめたような、妖しいほど官能的な雰囲気をかもしだしている部分もある反面、イギリス、スペイン、フランスなどの俗謡や舞曲に素材を求めて、たくみに処理しているので、比較的ポピュラリティももっている。

### 第1曲「ジーク Giges」

最初は「悲しいジーク Giges tristes」という題がついていた。(中略)〈ジーク〉のなかでオーボエ・ダモーレが吹いている旋律は、ドビュッシーが1905年に訪英のとき、近衛兵がバグパイプを吹いて行進するありさまや、通俗的なエコセーズ(スコットランドの民謡)から暗示されたものである。

### 第2曲「イベリア Iberia」

イベリア半島のスペインの情緒が、ドビュッシーにこの《イベリア》という3楽章の音楽を作らせた。なお第2楽章の〈夜の薫り〉は休みなく第3楽章の〈祭の日の朝〉に続く。ドビュッシーはこの作品について「逸話を求めることは無駄なことだ。特別な物語など何もない。私はただこの音楽が聴衆の想像を保つだけをあてにしている」といっているから、具体的な事物や物語の描写ではなく、あくまでドビュッシーの心眼に映じたスペイン情緒といったものである。

#### 第1楽章「街より道より」

冒頭からカステネットの響きを伴って、スペインのセヴィリャーナ風の舞曲のリズムが華やかにきこえてくる。

#### 第2楽章「夜の薫り」

〈街より道より〉と〈祭の日の朝〉が華やかで色彩的なのに反して、この〈夜の薫り〉は官能と幽玄の絶妙の世界であり、もっともドビュッシーらしい秘境を展開している。

#### 第3楽章「祭の日の朝」

うきうきするようなリズムで始まると思うや、一瞬第2楽章の終りの夜の気分がもどってきて中断されるが、すぐまたリズムックになり、しだいに活気づいてくる。夜は終わって祭の日の朝がやってきたのだ。

### 第3曲「春の Rondes de printemps」

この曲にはフランスの古い Rondes (詩と音楽の形式)《われわれは森へは行くまい》の変形が現れる。この曲の印象を「春の Rondes」ではなく「冬の北風の舞曲」と評した人もいた。妻のエマ (Emma Claude Debussy) にささげられている。

「ドビュッシー」作曲家別名曲ライブラリー 音楽之友社

松橋麻利著「ドビュッシー」作曲家・人と作品シリーズ 音楽之友社

## VIII. 映像 Images 1894 ～ピアノ～ もう一つの「映像」

1894年の冬に書かれた「(忘れられた)映像」は、カッコつきの標題で示されるように(カッコはドビュッシーのものではないが)、馴染みのない作品であり、知られざる「忘れられた」作品とも言える。(中略)切り離して考えられがちなドビュッシーの初期と成熟期の大規模なピアノ作品群を、ひとつの環として結びつける役割を果たしている。

ドビュッシー コチシュ CD06-141 CD解説

1894年の《映像》については、ドビュッシーの画家の友人、アンリ・ルロールの娘である若きイヴォンヌ・ルロールに慎み深く捧げられた自筆譜が存在しているということ以外、ほとんど何も分かっていない。この自筆譜は「1894年冬」という日付があるが、これは《牧神の午後への前奏曲》や、《ペレアスとメリザンド》の最初の草案と同時期である。中間楽章の「サラバンド」が1896年2月に『グラン・ジュールナル』誌に掲載された時、この雑誌は三つの《映像》がウジェヌ・フロモンにより、間近に出版されると予告していた。しかし、なぜか不明のまま、この出版は日の目を見なかった。1977年になってやっと、第一と第三曲が刊行されたのである。

ドビュッシー ピアノ作品全集 第2巻 ヤマハミュージックメディア

### 第1曲 Lent (Melancolique et doux)

第2曲 Dans le mouvement d'une "Sarabande", c'est-a-dire avec une elegance grave et lente, meme un pue viex portrait, souvenir du Louvre, etc...

「サラバンド」のテンポで、つまり荘重でゆっくりした優雅さ、さらには少々古めかしい肖像画、ルーヴル美術館の思い出、などなどと共に・・・

第3曲 Quelques aspects de "Nous n'irons plus au bois" parce qu'il fait un temps insupportabel

《もう森へは行かない》のいくつかの様相。だってうんざりする天気だから。

松橋麻利著「ドビュッシー」作曲家・人と作品シリーズ 音楽之友社